

## エッセイ

## スペインの折り紙 ウナムーノの Pajarita の由来・推定復元の試み

稲賀繁美

石造りの店のショー・ウィンドーを眺めていると、不思議なものが目にはいった。どうみても日本製の折り紙が、陶土の焼き物となって飾られていた。説明をみると、ウナムーノの発案になる「小さな鳥」pajaritaと書いてある。スペインの古い都、サラマンカで教鞭を執っていたときの出来事だった。

サラマンカ大学は、13世紀始めにはローマ教皇より承認され、ボローニヤ、パリと並んで、ヨーロッパ最古の大学のひとつとして歴史に名を残す。バロックの風格を残す旧市街はユネスコ世界遺産にも登録されている。スペインで一番美しい広場と呼ばれる、市内中央のマヨール広場から、南にフォン・セカ修道院へと至る石畳を右に入ったあたりに、ミゲル・デ・ウナムーノの住んでいた家屋が保存され、記念館となっている。ウナムーノ(Miguel de Unamuno y Jugo 1864-1936)は、オルテガ・イ・ガセとともに、近代スペインを代表する哲学者として著名で、1900年から1914年まで、サラマンカ大学の学長も務めた経歴をもつ人物だ。

そのウナムーノには「紙でできた小さな鳥の解剖」(1902)と称するユーモラスな文章が知られている。そこで哲学者は、四角な紙を折って作られた造形を、プラトンのアイデア、すなわち現象界の雛形にして不在の理想、に託す。幾何学という「種」に属するこの小鳥は、アイデアたちの棲む造形的な宇宙からの使者である、というわけだ。問題の「小さな鳥」は、形状としては、日本では「犬」として知られる折り紙と同類のもの。かれの「創作」はこの祖形とその応用に限られるようだ。

その後、ウナムーノは、セルバンテスの描いた『ドン・キホーテ』にスペイン人の倫理や人生観を読み解いた(1904)が、1914年には反政府的な思想が問題とされて、サラマンカ大学学長を罷免。さらに10年後の1924年には、リベラ独裁政権を批判してサラマンカからの追放を言い渡され、フェルテ・ペントゥーラ島に幽閉されたのに続き、1930年にまで及ぶフランス亡命を余儀なくされた。独裁政権の崩壊にともない、サラマンカに戻ったウナムーノは、1934年、終身総長の名譽を得るが、その晩年、1936年にスペイン内戦が勃発するや、反戦を説いたため、大学を追放され、自宅に軟禁され、失意のまま、72年の生涯を閉じた。

この反骨の哲人が、はたして日本から密かな発想を得てpajaritaを発案したのか、それともプラトンのアイデアの世界から直接啓示を受けて、鳥の幾何学的原型を構想したのかは、定かではない。おもしろいのは、ウナムーノおじさんが、小鳥の性別を創り分けていた事実だろう。雄、雌につづいて、両性寓有のヘルマフロディタ、さらには無性の鳥、という4種類の亜種?を折り分けてみせている。日本でいえば、平安以来といわれる雄蝶・雌蝶の縁起物に、折り紙の起源が遡られることも思い出される。

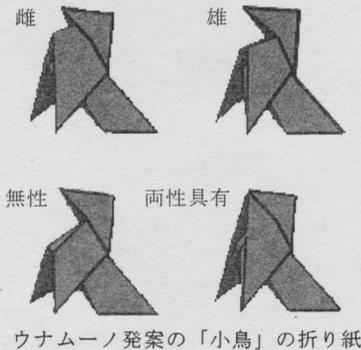
サラマンカの市民は、かれらの敬愛するウナムーノ先生が「折り紙」の発明者と信じて疑わない。日本にも同じようなものがある、といっても首を傾げるばかり。そのウナムーノが亡命したパリでは、スペイン趣味で有名だった肖像画家のカロリユス・デュラン(1883-1917)が《幸せ作り》(1870: デトロイト美術館)という絵を描いていた。日本の折り紙の「犬」が、生きた鸚鵡とご対面している。その様を見て喜ぶ赤ん坊の姿に、家族が微笑んでいる。絵柄からは、すでに同時代のパリで「犬」が「鳥」に変貌して理解されていたことが知られる。作品の主題は、ロココの時代の「アモールを売る女」(ダヴィッドの師だったヴィヤンの作例などが知られる)の延長上にあるものといえようか。知られるように、

カロリユス・デュランは、日本趣味のサークルとも密接な接触をもっていた。とすれば、日本経由の折り紙がカロリユス・デュランの絵などを通じて、パリ滞在中のウナムーノの脳裏に刻まれ、そこからやがて「小さな鳥」が生まれおちた、といった経緯も、あるいは推定復元できようか。もっともこれは、スペイン起源を唱える論者には、とても承諾できない推論ではあるのだが。

折り紙の日本起源に執拗に拘るのは筋違いというものだろう。正方形の紙を幾何学的に折りたたむという操作が潜在的に秘めている造形的可能性。それが極東では折り紙として特異な発達を見せ、ユーラシア半島の西端のスペインでは、孤高の哲学者に、プラトンの理想世界的设计図を垣間見させた。こうして、いわば特殊日本的な遊技が、人類史的な寸法で普遍性をもったメッセージへと飛躍した、ともいえるだろう。日本の「犬」は、スペインで「鳥」となって大空に飛翔した。

サラマンカには、近年日本企業の献金もあって日西文化会館が開館している。折り紙を通じた、日本とスペイン語圏の文化交流が、サラマンカを拠点として、またあらたな羽ばたきを見せてくれることを祈りたい。

2008年4月26日



ホセ・ソラノによるウナムーノの肖像  
(1933年) 国立ソフィア妃芸術センター所蔵



カリユロス・デュラン《幸せ造り》  
1870年、カンヴァスに油彩、デトロイト・  
インスティテュート・オブ・アート